

2025 年度学生実態調査における卒業予定者の満足度等について

実施時期:2025年9月22日から9月30日まで

調査対象:鎮西学院大学の4年生

調査方法:Googleフォームを使用

回答者数:116名

回答率:82.9%(休学中、除籍中の学生などは母数から除外した)

鎮西学院大学 IR 室

■学びが役に立った程度について

「2025 年度学生実態調査における 4 年生の回答を見ると、「大学での勉強の方法(スタディスキル)を学ぶ科目」については、「とても役に立った」が約 37%、「少し役に立った」が約 49%となっており、合わせて約 86%の学生が「役に立った」と評価している。一方、「あまり役に立たなかった」は約 7%、「全く役に立たなかった」は約 7%であった。

また、「ゼミでの少人数教育」については、「とても役に立った」が約 56%、「少し役に立った」が約 39%であり、合わせて約 95%の学生が肯定的に評価している。否定的な回答は「あまり役に立たなかった」が約 4%程度で、「全く役に立たなかった」という回答はほとんど見られなかった。

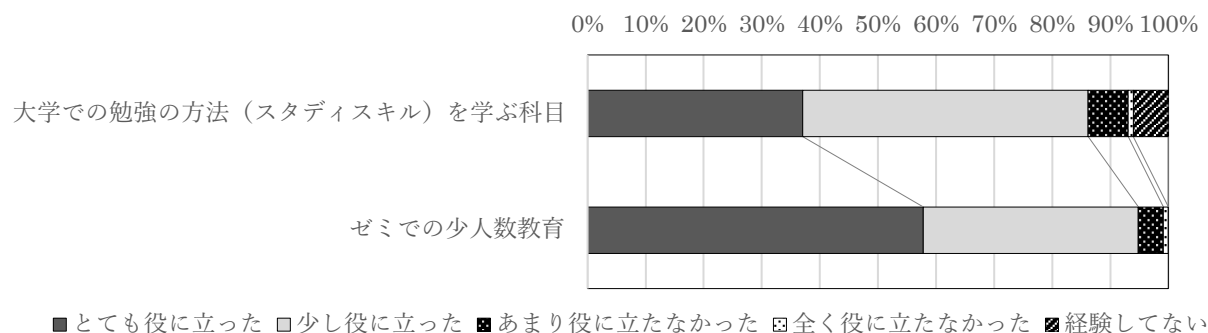
以上の結果から、4 年生にとって、大学で学ぶための基本的なスタディスキルと、ゼミにおける少人数教育はいずれも学修上有益であったと考えられる。特に、ゼミでの少人数教育については、「とても役に立った」と回答した学生が半数を超えており、教員との距離が近い環境での指導や、学生同士の意見交換、卒業論文等に向けた専門的な学習が、学生の学修成果に大きく貢献したものと考えられる。

一方で、スタディスキルについては、肯定的な評価が約 86%に達しているものの、ゼミでの少人数教育と比較すると「とても役に立った」の割合が低い。このことから、今後はスタディスキル教育について、レポート作成、情報収集、プレゼンテーション、研究方法など、4 年次の卒業論文や就職後にも直接活用できる実践的な内容との接続をさらに強化することが望まれる。

総括すると、4 年生の学修経験において、特にゼミでの少人数教育が高く評価されており、学生の主体的な学びや専門性の向上に重要な役割を果たしていることが確認できる。

表 1 学びが役に立った程度について〔2025 年度学生実態調査（4 年生）〕 (単位%)

	とても役に 立った	少し役に 立った	あまり役に 立たなかった	全く役に 立たなかった	経験してない
大学での勉強の方法を学ぶ科目	37.1	49.1	6.9	0.9	6.0
ゼミでの少人数教育	57.8	37.1	4.3	0.9	0.0



役に立った程度について【4 年生】〔2025年度学生実態調査〕

■力の身についた程度について

2025 年度の学生実態調査では、大学での学修を通してどのような能力が身についたかについて、「十分身についた」「ある程度身についた」「あまり身につけていない」「身につけていない」の4段階で調査を行った。

全体として、多くの項目において「十分身についた」または「ある程度身についた」と回答した学生の割合が高く、大学での学修を通して幅広い能力が身につけていることが確認できる。

特に、「専門分野に関する知識」「将来の仕事に関係がある知識や技術」「文章を書く力」については肯定的な回答が非常に多く、専門教育やゼミ等を通じた学修が、専門知識の習得だけでなく、社会や職業につながる知識・技能の形成にも効果を上げていると考えられる。また、「文献や資料や数量データを集めたり分析する力」「プレゼンテーションの力」「問題をみつけて解決する力」についても肯定的な回答が多く、情報収集・分析、発表、問題解決といった大学教育において重要な汎用的能力が一定程度身につけていることがうかがえる。

さらに、「答えのない問題を、自分の頭で考え抜く力」「いろんな人々の理解を得ながら協力して何かをする力」「はばひろい知識やものを見る力」「異なる文化についての知識や理解する力」などについても、肯定的な回答が比較的高い割合を占めている。これらは、専門科目だけでなく、ゼミでの少人数教育、グループ活動、地域・国際交流などを含めた幅広い学習経験が、学生の主体性や協働性、異文化理解の育成に寄与していることを示している。

一方、改善が必要な項目も確認できる。特に、**「外国語を話す力」および「統計やデータサイエンスに関係する力」については、他の項目と比較して「十分身についた」とする回答が少なく、「あまり身につけていない」「身につけていない」とする回答も一定程度見られる。**また、「リーダーとしての力」についても、他の能力と比較すると肯定的な回答の割合がやや低く、今後さらに育成していく必要がある。

以上の結果から、2025 年度の教育活動は、専門知識、文章作成、情報収集・分析、プレゼンテーション、問題解決、異文化理解などの能力の育成に一定の成果を上げていると評価できる。特に、専門教育と少人数教育を組み合わせることで、学生が知識を身につけるだけでなく、それを活用して考え、表現し、他者と協力する力の形成につながっていると考えられる。

今後は、現在比較的低い外国語運用能力、統計・データサイエンス能力、リーダーシップ能力について、授業やゼミ、PBL、課外活動等を活用した実践的な学習機会をさらに充実させることが重要である。特に、実際のデータを用いた分析、英語等を使用した発表・交流、学生が主体となって企画・運営する活動などを取り入れることで、これらの能力をより実践的に身につけることが期待される。

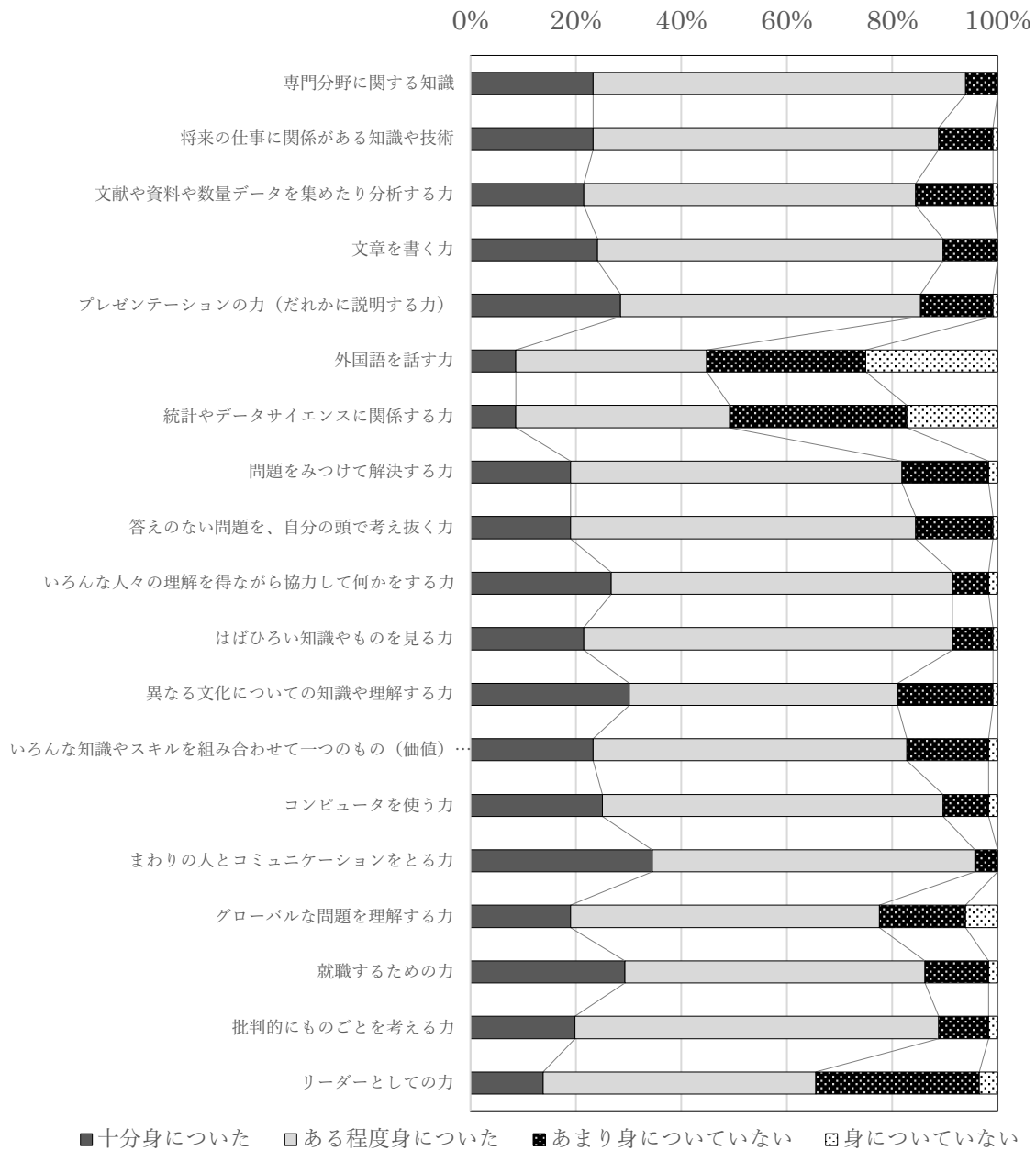
2025 年度の調査結果から、4 年生は大学での学修を通じて、専門知識だけでなく、文章作成、情報収集・分析、プレゼンテーション、問題解決、協働、異文化理解など、社会で必要とされる幅広い能力を身につけていることが確認された。一方で、外国語、データサイエンス、リーダーシップについては今後の重点的な教育課題として位置づけ、より実践的な学修機会を提供していく必要がある。

表 2 力の身についた程度〔2025 年度学生実態調査（4 年）〕

（単位％）

	十分身についた	ある程度身についた	あまり身についていない	身についていない
専門分野に関する知識	23.3	70.7	6.0	0.0
将来の仕事に関係がある知識や技術	23.3	65.5	10.3	0.9
文献や資料や数量データを集めたり分析する力	21.6	62.9	14.7	0.9
文章を書く力	24.1	65.5	10.3	0.0
プレゼンテーションの力（だれかに説明する力）	28.4	56.9	13.8	0.9
外国語を話す力	8.6	36.2	30.2	25.0
統計やデータサイエンスに関係する力	8.6	40.5	33.6	17.2
問題をみつけて解決する力	19.0	62.9	16.4	1.7
答えのない問題を、自分の頭で考え抜く力	19.0	65.5	14.7	0.9
いろんな人々の理解を得ながら協力して何かをする力	26.7	64.7	6.9	1.7
はばひろい知識やものを見る力	21.6	69.8	7.8	0.9
異なる文化についての知識や理解する力	30.2	50.9	18.1	0.9
いろんな知識やスキルを組み合わせる一つのもの（価値）をつくりだす力	23.3	59.5	15.5	1.7
コンピュータを使う力	25.0	64.7	8.6	1.7
まわりの人とコミュニケーションをとる力	34.5	61.2	4.3	0.0
グローバルな問題を理解する力	19.0	58.6	16.4	6.0
就職するための力	29.3	56.9	12.1	1.7
批判的にものごとを考える力	19.8	69.0	9.5	1.7
リーダーとしての力	13.8	51.7	31.0	3.4

批判する力（力の身についた程度） [2025年度]



■学生が持つ印象や理解

「主体的な学び」については、「とてもそう思う」が約 27%、「まあそう思う」が約 55%で、肯定的な回答が合わせて約 82%となっている。一方、「あまり思わない」は約 17%、「思わない」はごく少数である。「大学の熱意」については、「とてもそう思う」が約 20%、「まあそう思う」が約 61%で、肯定的な回答は約 81%に達している。「成長の実感」については、「とてもそう思う」が約 26%、「まあそう思う」が約 63%で、肯定的な回答が約 89%と、3 項目の中で最も高い結果となっている。

2025 年度の学生は、大学での学びについて全体的に肯定的な印象を持っており、とりわけ「成長の実感」が高く評価されていることが確認された。また、「主体的な学び」についても 8 割を超える学生が肯定的に評価しており、学生が受動的に知識を受け取るだけでなく、自ら考え、学ぶ教育環境が一定程度形成されていると評価できる。

一方で、各項目において約 1～2 割の学生が「あまりそう思わない」と回答していることから、すべての学生が大学での学びや成長を十分に実感できているわけではない点には留意する必要がある。

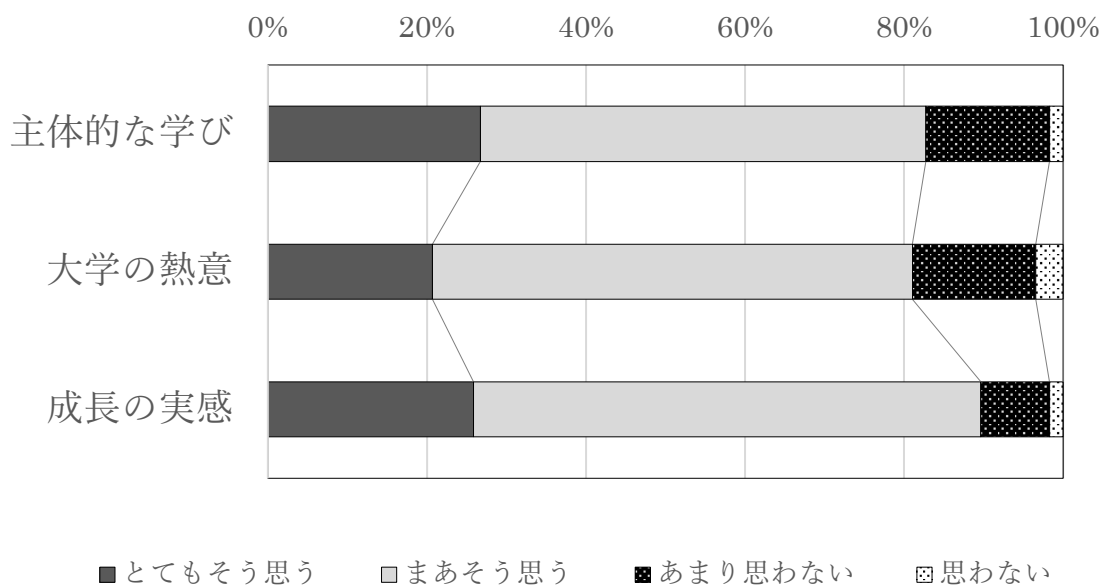
今後は、学生の主体的な学びをさらに促進するとともに、学修成果を学生自身が具体的に認識できる機会を増やすことが重要である。例えば、PBL やゼミ活動、プレゼンテーション、地域・国際交流などの実践的な学習を充実させ、学習前後の能力の変化を学生自身が振り返る機会を設けることが有効である。

2025 年度学生実態調査の結果、「主体的な学び」「大学の熱意」「成長の実感」の 3 項目について、いずれも 8 割以上の学生が肯定的な回答を示した。特に「成長の実感」は約 9 割と高く、学生が大学での学修や学生生活を通して自身の成長を実感していることが確認された。この結果から、本学の教育活動は学生の主体性を育成するとともに、学生自身が成長を認識できる教育環境の形成に一定の成果を上げていると評価できる。今後は、肯定的な評価をさらに高めるとともに、大学での学びや成長を十分に実感できていない学生への支援・教育方法の改善を進める必要がある。

表 3 学生が持つ印象や理解〔2025 年度学生実態調査（4 年）〕

（単位％）

	とてもそう思う	まあそう思う	あまり思わない	思わない
主体的な学び	26.7	56.0	15.5	1.7
大学の熱意	20.7	60.3	15.5	3.4
成長の実感	25.9	63.8	8.6	1.7



成長の実感（学生が持つ印象や理解）〔2025 年度〕

■まとめ

2025 年度学生実態調査における 4 年生の回答を、「学びが役に立った程度」「力の身についた程度」「学生が持つ印象や理解」の 3 つの観点から総合的に分析すると、学生は大学での学修や教育活動について概ね高い評価を示しており、特に自身の成長やゼミを中心とした学修効果を肯定的に捉えていることが分かる。

1. 学びが役に立った程度

「大学での勉強の方法(スタディスキル)を学ぶ科目」については、約 86%の学生が「とても役に立った」または「少し役に立った」と回答している。また、「ゼミでの少人数教育」については、約 95%の学生が肯定的に評価しており、特に「とても役に立った」とする学生が半数を超えている。

このことから、大学で身につけた学習方法や、ゼミにおける少人数教育が、学生の学修や卒業研究を進める上で有効であったと考えられる。特に、教員からのきめ細かな指導や学生同士の意見交換が、学修への理解を深めることにつながっていると評価できる。

2. 力の身についた程度

能力の習得については、専門分野に関する知識、将来の仕事に関係する知識・技術、文章を書く力、プレゼンテーションの力、問題を見つけて解決する力などについて、肯定的な評価が高い。

また、「答えのない問題を自分の頭で考え抜く力」「他者と協力して活動する力」「幅広い知識やものを見る力」「異なる文化についての知識や理解」などについても、一定以上の肯定的な評価が得られている。これらの結果から、専門知識だけではなく、思考力、表現力、問題解決能力、協働性、異文化理解など、社会生活や職業生活に必要な汎用的能力の育成にも一定の成果があったと考えられる。

一方、外国語を話す力、統計・データサイエンスに関する力、リーダーとしての力については、他の項目と比較して「十分身についた」とする割合が低く、今後の教育上の重点課題として捉える必要がある。

3. 学生が持つ印象や理解

「主体的な学び」「大学の熱意」「成長の実感」の 3 項目については、いずれも 8 割以上の学生が肯定的な回答を示している。

特に「成長の実感」は約 9 割と高く、4 年間の大学生活を通じて、学生自身が知識や能力、人間的な成長を実感していることがうかがえる。また、「主体的な学び」についても約 8 割が肯定的に回答しており、学生が自ら考え、学習する機会が一定程度確保されていると評価できる。

「大学の熱意」についても約 8 割が肯定的であり、学生は大学の教育活動や学生への支援について、概ね熱意を感じていると考えられる。

2025 年度学生実態調査の結果、4 年生は本学の教育活動について概ね高い満足度を示していることが確認された。特に、ゼミでの少人数教育については約 95%の学生が肯定的に評価しており、きめ細かな指導や学生同士の交流を通じた学修が、学生の成長に大きく寄与していると考えられる。また、専門知識、文章作成、プレゼンテーション、問題解決、協働などの能力についても肯定的な評価が得られている。さらに、「成長の実感」は約 9 割と非常に高く、学生自身が 4 年間の大学生活を通じて成長を実感していることが分かった。一方、外国語、データサイエンス、リーダーシップ等については今後の改善課題として捉え、実践的な学習機会の充実を図る必要がある。以上から、本学の教育活動は、学生の専門性と汎用的能力を育成し、学生自身の成長実感につなげる上で一定の成果を上げていると評価できる。